

ならばに金若干を封じ、母の尸のかたはらに置いて、夜をこめて去りしとぞ。
 〔名家略傳〕義僕元助

赤穂義士片岡源五右衛門高房の家僕を元助といへり、幼ときより高房の家に畜はれて人となり、篤實勤行にして、事を執ること甚だつゝしめり、高房、赤穂を去るの日に、かねて召しつかふ奴婢に、ことごとく暇をとらせけり、されども元助ひとり留りて去らず、高房に従ひて江戸に來り、朝夕薪水の勞をいとはず、出入事を奉りて餘力をのこさず、その心を盡すこと昔日に勝れり、略復讐のことはてしをりから、何くよりか來りけん、拂曉高房が出るを待受け、一筥の密柑を捧げ持て、諸君さだめて昨夜のはたらきに渴し給はん、いざまゐらせよと、彼密柑をおのゝくにあたへ、泉岳寺までつきそひ行き、涕泣してぞ別れける、

〔甲子夜話〕吾師皆川子ノ話タルハ、天川屋儀兵衛ト淨瑠璃本ニアルモノハ、其實尼崎屋儀兵衛ト云テ、大坂ノ商估ニシテ、淺野内匠頭ノ用達ナリ、大石内藏助復讐ノ前、著込ノ鎖帷子ヲ數多ク造タルコトニ預リシガ、町人ノ武具用意ト云風聞アリテ、官ノ疑カ、リ、呼出テ吟味アレドモ、陳ジテ言ハズ、後ハ拷問スレドモ言ハズ、終ニ其背ヲサキテ、鉛ヲ流シ入ルニ至レドモ白狀セズ、アマリニキビシキ拷問ニヨリ、死セントセシコト幾度モ有シトゾ、然レドモ白狀セザレバ、久シク囹圄ニ下リ居シガ、江戸ニテ復讐ノコトアリト、牢中ニテ聞及ビ、儀兵衛改メテ申ニハ、追々御吟味ノコト白狀仕度トナリ、乃呼出テ申口ヲ聞ニ、ソノ身淺野家數代ノ出入ニテ、厚恩蒙シ者ナリ、彼家斷絶ノ後、大石格別ニ目ヲカケ、一大事ヲ某ニ申含、江戸ニテハ人目有トテ、此地ニテ密ニ鎖帷子ヲ造リタリ、全く公儀ヘノ野心ニ非ズ、ハヤ復讐成就ノ上ハ、何様ニモ御仕置奉願ト云ケル、之ヲ聞テ奉行ヲ始メ、其場ニ有リアフ人々、皆涙ヲ流サバルハ無カリシトナリ、

〔鶴梁文鈔六〕烈士喜劍碑